近代教育の出発から今日まで、道徳教育の歴史と論点を網羅！

文献資料集成

日本道徳教育論争史

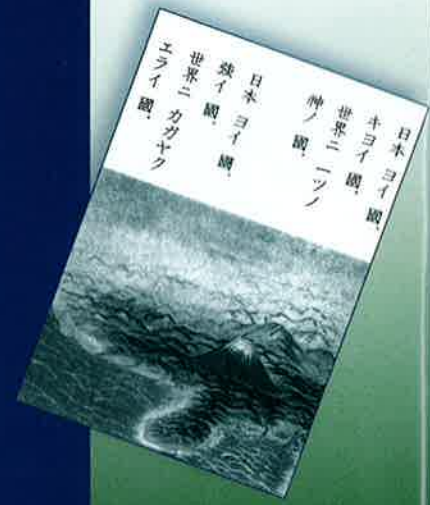
【監修・解説】貝塚茂樹

全Ⅲ期・全15巻

日本図書センター

〈第Ⅰ期・全5巻〉近代道徳教育の模索と創出
〈第Ⅱ期・全5巻〉修身教育の改革と挫折
〈第Ⅲ期・全5巻〉戦後道徳教育の停滞と再生

教科化が進められる現在、待望の完結！

「道徳教育」は、どうあるべきか。
戦前と戦後の「断絶」を超え、
歴史的・学問的に検討するために。

文献資料集成

日本道徳教育論争史

全Ⅲ期・全15巻

完結

【監修・解説】貝塚茂樹（武蔵野大学教授）　■体裁　A５判・上製・総約9000頁

	内容	巻数	価格	ISBN 978-4-284-	刊行
第Ⅰ期	近代道徳教育の模索と創出	全５巻	本体 94,000 円＋税	30607-2	2012年6月 刊行
第Ⅱ期	修身教育の改革と挫折	全５巻	本体 94,000 円＋税	30613-3	2013年6月 刊行
第Ⅲ期	戦後道徳教育の停滞と再生	全５巻	本体 94,000 円＋税	30619-5	2015年1月 新刊

全Ⅲ期・全15巻【揃定価】揃本体 282,000 円＋税

おすすめ先	教育学（道徳教育、教育史、教育思想）の研究者／倫理学・近代日本思想史・近代史の研究者／社会教育団体／公共・大学図書館

文献資料集成 日本道徳教育論争史　全Ⅲ期・全15巻　構成

第Ⅰ期　近代道徳教育の模索と創出　全５巻　〔明治13～大正14年ごろ〕

第１巻　徳育論争と修身教育
第２巻　教育勅語と「教育と宗教」論争
第３巻　国定修身教科書の成立（第一期・第二期）と修身教育
第４巻　国民道徳論と修身教授
第５巻　修身教授論の諸相

教育勅語の成立などを巡る明治期の基本的な文献に加え、徳育論争、「教育と宗教」論争、国民道徳論とその批判など、当時の雑誌・書籍から主張や論争を収録。

第Ⅱ期　修身教育の改革と挫折　全５巻　〔明治43～昭和20年ごろ〕

第６巻　修身教授改革論の展開
第７巻　修身教育の実践と国定修身教科書（第三期～第五期）
第８巻　修身教育と公民教育・訓練
第９巻　修身教育と宗教教育
第10巻　日本精神・皇国民の錬成と国民道徳

大正から昭和戦前・戦中期の基本的な文献に加え、民間の教育雑誌など極めて貴重な資料から多数の主張や論文を収録し、戦前期の道徳教育の実像を検証。

第Ⅲ期　戦後道徳教育の停滞と再生　全５巻　〔昭和21年～現代まで〕

第11巻　「修身科」復活と「国民実践要領」論争
第12巻　「特設道徳」論争
第13巻　「期待される人間像」論争
第14巻　道徳教育の課題と授業論をめぐる論争
第15巻　「心のノート」と道徳の「教科化」論争

戦後教育改革における修身科の扱いから、「道徳の時間」の設置、「期待される人間像」を経て教科化へ。戦後における道徳教育をめぐる論考を幅広く収録。

日本図書センター
〒112-0012　東京都文京区大塚3-8-2
TEL.03-3947-9387　FAX.03-3947-1774
http://www.nihontosho.co.jp

取扱書店

刊行にあたって

貝塚 茂樹（武蔵野大学教授）

教育における戦前と戦後の「断絶」は明白である。なかでも道徳教育の「断絶」は著しく、戦後の戦前に対するまなざしは、むしろ「断罪」に近い。

私たちは、戦後の道徳教育の方が戦前の道徳教育よりも「まとも」だと感覚的に思っている。しかしそれは、明らかな「思い込み」であり、「幻想」である。戦後に出版された道徳教育関連の文献が戦前の水準を超えているとは到底思えないからである。そもそも、戦後の道徳教育研究が、戦前の道徳教育を感情的に「断罪」することから出発したために、戦前までの道徳教育を学問的に検討する姿勢を決定的に欠落している。これは、学問研究としては「正常」ではないし、致命的な限界を抱え込んでいたことは明らかである。

「歴史から学ぶ」という視座を欠いた「思い込み」と「幻想」の蔓延は、今や道徳教育に関する深刻な「思考停止」をもたらしている。歴史と学問研究に目を塞いだ道徳教育論議は、安易なイデオロギー論に振り回され、必然的に「賛成か、反対か」といった二項対立の図式に回収されてしまった。学問的な理論を欠いた堂々巡りの「空中戦」が常態化する中では、道徳教育の本質に関わる「まとも」な論議はほとんど例外なく除外されてしまっている。

『文献資料集成　日本道徳教育論争史（全Ⅲ期・全15巻）』は、戦前と戦後との「断絶」を超え、「歴史から学ぶ」という観点から、今後の道徳教育を考えるための文献を提示した。具体的には、明治はじめの「徳育論争」から修身教育改革論、戦後教育改革から「道徳の時間」（1958年）の設置や「期待される人間像」（1966年）を経て、道徳の教科化へと至る歴史の歩みを15の「論争史」として構成し、その代表的な著書・論文を数多く収載した。

本文献資料集成には、近代教育の出発から今日に至るまでの道徳教育の歴史と論点がほぼ網羅されている。ここに収めた文献を多角的な視野から検討し、冷静かつ実証的に分析することは、これまでの「思考停止」から脱却し、新たな道徳教育の展望と地平を切り拓くことに資するはずである。『文献資料集成　日本道徳教育論争史』の刊行が、不毛なイデオロギー論を超えて、道徳教育を活発な学問研究の対象とするための礎石となれば幸いである。

二〇一四年一〇月二一日

特色

1. 道徳教育はどうあるべきかを学問的・歴史的に検討するために。明治のはじめから、現在までの日本の道徳教育の歴史を、トピック別で各巻に集成！　全巻に解説・解題を附す。

2. 教育専門誌から総合雑誌などの一般誌、官報、単行本まで幅広く収録。全15巻における収録著者は約三五〇名、論文・資料は約六五〇点に上る！

3. 教科化が進められ、道徳教育についての理念と方法論が具体的に問われるなか、明治から現代までを俯瞰する歴史的な視座を提供！　今後の道徳教育研究に欠かせない資料集成である。

推薦のことば　『文献資料集成　日本道徳教育論争史』刊行にあたって

道徳教育探求史としての「論争」史

森川 輝紀（元教育史学会代表理事 福山市立大学教授）

「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育」（旧教育基本法）を、私は、これが戦後教育の理念であると理解している。（現教育基本法では「真理と平和を希求する」は「真理と正義を希求し」と改められている。私は「正義の戦争」という使用例を連想してしまう。）戦後教育理念の「不明」論、戦後と戦前の「断絶」論に道徳教育の「停滞」をみる立場とは異なる。「断絶」する歴史などありえようはずがない。「断絶」という認識も「連続」の一つの理解であるにすぎない。それゆえに、戦後の道徳教育史を「停滞と再生」として把握することはできない。私は創造的な道徳教育探究への道であったと理解している。

私は道徳とは「生きることの意味を問うこと」と考えている。人が生きている事実は、道徳的判断をし、実践（経験）し、満たされぬ思いを更に追求していくことであると思う。それは無限のプロセスであり、その主体を形成する教育的営為を道徳教育と考えている。したがって「生きることの意味」を問うことは多元であり、その主体は一人一人にある。それゆえに道徳教育の存在自体が論争的であるといえる。道徳教育史に多大な研究蓄積を有する畏友貝塚茂樹さんが関連文献を整理し、論争史として編集されたこの第Ⅲ期全5巻を、私は戦後における創造的な道徳教育に向けての軌跡として読んでみたい。脱イデオロギーがまた新たな固定されたイデオロギーであってはならない。創造に向けての柔らかい相対的立場において、それぞれの「論争」がどのように道徳教育の問題性・課題性を論じているのかを考えてみたい。その意味で、欠くことのできない資料集成である。

道徳教育の空洞化と社会の迷走から脱するために

松下 良平（金沢大学教授）

戦後の日本人にとって道徳教育は躓きの石であった。忠君愛国の理念に支えられ、人びとを戦争へと導いた戦前の道徳教育を否定するあまり、道徳教育そのものを見失ってしまったからである。道徳教育に賛成か反対かという議論にかまけているうちに、道徳教育は秩序維持のために心や行動をコントロールする術へと痩せ細っていった。あるいは、工業化を推進し、ひたすら経済成長を追い求めるあまり、道徳教育はもっぱら勤勉と従順を強いる教育に成り下がっていった。

道徳とは本来、社会の最も基本的な礎である。幸福、正義、自由、平等、権利、義務、福祉、配慮、責任、連帯、抑圧、解放、生、死、平和、戦争、等々は、いずれも道徳思想のテーマである。そのため、道徳を無視する社会は必ずや迷走し、やがて滅びるであろう。それらについて練り上げられた思想や理念をもつことなしには、社会を維持することも変革することもできないからだ。

学校教育で扱うべき道徳とは何かという問いを教育勅語という絶対解の前で封じられてきた戦前と、そのような問いを無視してもやっていけるとうそぶいてきた戦後は、道徳教育への思慮の欠如という点でつながっている。その一方で、戦前と同様、戦後においても、無思慮な大声に抗った人びとがいたことも事実である。その両面をつまびらかにしてくれるこの文献資料集成を手がかりにして、躓きを糧とし、道徳教育の空洞化からの脱却を試みる人が増えることを願ってやまない。

＊本文献資料集成第Ⅲ期の刊行にあたっていただいた文章です。

収録文献

〈第Ⅲ期・戦後道徳教育の停滞と再生・全5巻〉

＊構成や収録内容は変更になることがございます。

第11巻「修身科」復活と「国民実践要領」論争

〔昭和21～28年ごろ〕戦後教育改革における修身科や教育勅語の扱いに関する資料や、天野貞祐による「国民実践要領」構想を巡る論文・資料を収録

道徳教育のあり方をめぐる論争

「国民道徳の頽廃と其の再建」田中耕太郎
「教育勅語論議」田中耕太郎
「新しい道徳教育への道（抄録）」平野武夫
「道徳教育」下程勇吉
「民主主義的新日本教育の理念」吉田熊次
「社会科における徳育の問題」勝部真長
「私はこう考える―新しい道徳教育の問題」天野貞祐
「昔の修身と今の社会科」勝部真長
「新しい道徳教育への道」平野武夫
「社会科と道徳教育」上田薫
「道徳教育談議」勝部真長
「教育における人間像の条件について」勝田守一
「平和のための道徳教育」矢川徳光
「日本人の道徳（座談会）」丸山眞男／磯田進／鶴見和子／竹内好
「道徳教育について」天野貞祐
「道徳の教育」勝田守一
「現代日本の道徳教育」長洲一二
「道徳教育の観点より見た社会科の成立事情と社会科についての疑問」日高第四郎
「道徳教育の復活」家永三郎
「社会科と道徳教育（座談会）」古川哲史ほか
「教育勅語の運命」田中耕太郎

→戦後すぐに新しい道徳教育を構想した一人、平野武夫の『新しい道徳教育への道』。

「修身科」復活をめぐる論争

「道徳教育とカリキュラム」梅根悟
「修身科問題をめぐって」天野貞祐／長谷川如是閑
「修身科復活の問題（座談会）」桂廣介／周郷博／大石譲／依田新／小見山栄一／上武正二／中野佐三
「『道徳教育』論議」勝部真長
「修身科のない学校教育」倉富崇人
「修身教育は不要」新居格
「修身科は復活するか」海後宗臣
「修身問題について」務台理作
「学校と道徳教育―修身科について」宮沢俊義
「修身教育に就いて」宇野哲人
「修身科特設問題について」高山岩男
「『道徳教育』論議」勝部 真長

「国民実践要領」をめぐる論争

「わたしの心境―『実践要領』をめぐって」天野貞祐
「国民実践要領をめぐって（座談会）」勝部真長／長屋喜一／古川哲史／原富男／小野康正／臼井享一／渡部正一／村上瑚磨雄　ほか
「天野文相にのぞむ」勝田守一
「国民実践要領の由来」天野貞祐
「『道徳教育』論議の問題点を衝く」大浦猛

資料編

「公民教育刷新委員会答申」公民教育刷新委員会
「修身、日本歴史及ビ地理停止ニ関スル件」連合国軍総司令部
「教育勅語排除・失効確認決議」衆議院・参議院
「国民実践要領」天野貞祐
「第十国会における文教問題と天野文相答弁要旨」文部省
「第十二回国会参議院文部委員会会議録　第14号」
「天野文相、国民実践要領問題―その主張と批判」道徳教育研究会
新聞社説
「青少年のしつけ」毎日新聞／「道徳教育の在り方」朝日新聞／「修身科無用論」読売新聞／「修身不要論に反対する」東京新聞／「修身徳目の権威の問題」日本経済新聞社説／「天野文相の錯覚」読売新聞／「国民実践要領の問題」東京新聞／「国民実践要領は不要か」東京新聞

→雑誌『心』に掲載された「国民実践要領の由来」は、その背景を天野貞祐自身が明らかにした貴重な記事である。

第12巻「特設道徳」論争

〔昭和32～34年ごろ〕昭和33年の「道徳の時間」設置をめぐり、賛成派・反対派の代表的な論稿を中心に、時系列的に収録

「道徳の時間」設置をめぐる論争

「現代日本教育論（抄録）」城丸章夫
「文部省の『道徳教育』批判」竹内良知
「道徳の時間設置の意義」稲富栄次郎
「現下道徳教育の問題点―『道徳の時間』の特設をめぐって（抄録）」平野武夫
「共同討議　道徳教育をめぐって」永井道雄／梅根悟／大島康正／澤田慶輔／日高六郎
「徳目と道徳教育」上田薫
「道徳教育と教師の態度」高坂正顕
「道徳教育を支えるもの」蝋山政道・亀井勝一郎
「道徳教育の問題点をめぐって」内海巌
「道徳教育と憲法と」戒能通孝
「教育内容の改善について」内藤誉三郎
「生活指導と道徳教育」山田栄
「道徳教育の充実について」上野芳太郎
「アジア・アフリカの新しい動向と道徳教育」上原専禄・五十嵐顕
「道徳教育政策の矛盾をつく」成田克矢
「生活指導と道徳教育」宮坂哲文
「道徳教育における生活主義の立場」梅根悟
「特設時間の『道徳』についての注意点」海後宗臣
「特設時間のあり方について」澤田慶輔
「道徳・生活指導・社会科」梅根悟
「『道徳要領』の『人間尊重』について」宗像誠也
「公教育における道徳教育の問題」勝田守一
「道徳教育に関する宿題報告とシンポジウム」日本教育学会
「道徳教育の理論的諸問題」大橋精夫
「小・中学校『道徳』実施要綱とその批判」日本教育生活者連盟
「道徳と道徳教育その問題点」木下一雄
「生活指導では不十分だ」堀秀彦
「道徳実践要綱の特質と問題点（座談会）」国分一太郎／澤田慶輔／道下彰／本間万亀尾／中野佐三／長島貞夫
「特設時間の性格」勝部真長
「指導要領『道徳』をめぐる問題点」堀秀彦
「生活指導か道徳教育か（座談会）」勝部真長／春田正治／長島貞夫
「道徳教育論争における三つの盲点」尾田幸雄
「『特設』道徳になぜ反対するか」山田洸
「『学校における道徳教育の充実方策』についての批判」中野光
「『道徳教育の充実方策』について」日高第四郎
「修身科特設を批判す」長田新
「修身科復活の声をめぐって（座談会）」梅根悟／木下一雄／堀秀彦／長島貞夫
「『修身』に代るべき新しい道徳教育（座談会）」永井道雄／臼井吉見／清水慶子／佐藤美子／野々目桂三

↑「道徳の時間」設置に対する批判的意見のひとつ、日本教育学会による「道徳教育に関する問題点」。

資料編

「小学校・中学校道徳実施要綱」文部省
「道徳教育に関する問題点（草案）」日本教育学会教育政策特別委員会
「道徳教育者側の責任」読売新聞
「時間特設・独立教科による『道徳』について」日本教職員組合
「学校における道徳教育の充実方策について」教育課程審議会

←雑誌『婦人公論』掲載の座談会。「修身科」への評価や道徳教育のあり方は、広く一般にも関心を集める話題であった。

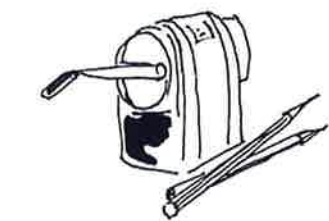
第13巻　「期待される人間像」論争

〔昭和40～42年ごろ〕中央教育審議会による「期待される人間像」は一般にも関心を呼び、活発な議論が展開された。教育界からマスコミまで幅広く収録

「期待される人間像」をめぐる論争

「私見『期待される人間像』」高坂正顕
「人間像の探求」高坂正顕
「明治以降・教育目的の変遷（抄録）」稲富栄次郎
「期待される人間像（中間草案）に関する主要論文等意見」文部省調査局企画課
「答申と教育再改革」森戸辰男
「『期待される人間像』について」高坂正顕
「人間形成の目標としての『期待される人間像』について（座談会）」高坂正顕／大内進／杉上忠幸／矢谷芳雄／西田亀久夫／松村謙／蜂須賀孝
「絵にかかれたモチ」池田潔
「『期待される人間像』は重要文書」永井道雄
「人間性高揚を重点に」宇野精一
「新教育勅語待望論」福田恒存
「退屈に負けない人間」清水幾太郎
「不幸なら手を叩こう！─〈期待される人間像〉を批判する」大江健三郎
「骨抜きにされた批判精神」上田薫
「『人間像』の問題について」勝田守一
「『道徳教育と人間像』によせて」村井実
「教育と人間像」森戸辰男
「期待される人間像について」野津文雄／富田義雄／近藤修博
「学校教育と人つくりの課題」木下一雄
「『期待される人間像』について」高坂正顕
「『期待される人間像』の最終報告批判」矢川徳光
「期待される人間像についての雑感」唐澤富太郎
「期待される人間像について」池尾信一
「日本人としての期待される人間像」尾田幸雄
「期待される人間像について」木下一雄
「パネルデスカション『期待される人間像』」日本道徳教育学会
「道徳教育の根本問題」高坂正顕
「『中間まとめ』にみる道徳教育の問題」山田昇
「勅語・基本法・期待される人間像」堀尾輝久
「生活修身の限界」小瀬仁作
「『期待される人間像』をめぐって（座談会）」安斎伸／佐藤直助／辻清／松川成夫
「『期待される人間像』─当面する日本人の課題」向坂逸郎
「教育基本法と『期待される人間像』中間草案2」大田堯
「『期待される人間像』を語る（座談会）」高坂正顕／村岡花子／柴田周吉／前田一

資料編

「期待される人間像（中間草案）」中央教育審議会第19特別委員会
「期待される人間像（最終報告）」中央教育審議会第19特別委員会

←↑「期待される人間像」を巡る一般紙や経済誌の記事。「期待される人間像」は、大きな話題となったが、必ずしも道徳教育における議論の深まりに結びついたとはいえなかった。

第14巻　道徳教育の課題と授業論をめぐる論争

〔昭和33～55年ごろ〕「愛国心」や「宗教的情操」など現代も続く道徳教育の課題と、「道徳の時間」の授業論及び指導法に関する論稿を中心に収録

道徳教育の課題をめぐる論議

「教育の実践性と内面性（抄録）」森昭
「教育と政治」下程勇吉
「何が宗教教育をタブー視させたのか」貝塚茂樹
「愛国心の問題」天野貞祐
「道徳教育としての愛国心の育成」上原専禄
「変革期の道徳教育」森昭
「愛国心について」古川哲史
「『愛国心』が問題にされるについて」原富男
「道徳基準と子どもの道徳意識」波多野述麿
「道徳教育における徳目の構造化」上田薫
「道徳教育のある空白」小川太郎
「宗教教育と道徳教育」平塚益徳
「『情操』をめぐる倫理と宗教」戸田義雄
「権力のイデオロギーと学習指導要領」堀尾輝久
「道徳指導における教師の条件」青木孝頼
「小学校の道徳教育」波多野述麿
「学校における道徳教育の可能性と限界」片山清一
「宗教的情操の指導」深川恒喜
「道徳教育における宗教的なものの問題」沼田滋夫
「生と死について」小池長之
「畏敬の心の育成について」朝倉哲夫
「絶対者に対する畏敬心」小柏仁鋭
「現時、特に重視すべき道徳指導内容」内海巌
「『道徳』の指導内容の再検討」村上敏治
「日本人として『生命への畏敬』を考える」相良亨
「『内からの道徳教育』のすすめ」伊藤隆二
「宗教文化教育の提唱」井上順孝
「『教育上尊重』されるべき宗教の『地位』」廣瀬裕一
「愛国心工作と生活教育」梅根悟
「愛国心教育　美しい言葉の魔術」大熊信行
「愛国心と親孝行」武田清子
「行動の記録と『特設』道徳の評価の関連─特集・成績のつけ方見方」斑目文雄
「愛国心と国際理解を育成する今日的課題」間瀬正次

道徳の授業論・指導法をめぐる論議

「共同研究　道徳教育（抄録）」井坂行男／勝部真長／澤田慶輔
「『道徳』実践上の問題点」井坂行男／勝部真長／澤田慶輔／中村忠久／宮地忠雄
「道徳指導法批判」井坂行男／勝部真長／澤田慶輔
「人間形成と道徳（抄録）」村田昇
「道徳授業の改造（抄録）」宮田丈夫／村田昇
「道徳教育の進路（抄録）」青木孝頼
「道徳指導の問題点」勝部真長
「道徳指導の心理的基礎」澤田慶輔
「道徳時間の展開過程」井坂行男／澤田慶輔／間瀬正次／松本浩記
「『道徳授業の平板化』をもたらすもの」平野武夫
「道徳学習指導要領の検討批評」金子光男
「指導過程（道徳）の基本問題」文部省（村上敏治）
「道徳教育における評価の意義」池田貞美
「道徳の指導過程を考える」押谷慶昭
「道徳の時間の指導の評価」文部科学省（日下哲也）
「連載討論1」青木孝頼／井上治郎
「提案　価値の一般化はなぜ必要か」青木孝頼
「提案に対する意見1　価値の一般化と指導上の留意点」村田昇
「提案に対する意見2　道徳指導における「価値の一般化」についての一考察」安藤一雄
「提案に対する意見3　わたしの疑問と批判」井上治郎
「『提案に対する意見』を読んで」青木孝頼
「連載討論10」青木孝頼／井上治郎

→日本道徳教育学会『道徳と教育』。「愛国心」や「宗教教育」のとらえ方や扱いは、明治期から現代まで、日本の道徳教育に通底する課題である。

→井坂行男、勝部真長、澤田慶輔による『共同研究　道徳教育』。

推薦のことば　『文献資料集成　日本道徳教育論争史』刊行にあたって

近代日本が辿った自己葛藤史

潮木　守一（名古屋大学名誉教授　桜美林大学名誉教授）

人間は群れのなかで生まれ育つ。群れの生活は便利でもあるが、しばしば対立・葛藤も生まれる。こうした対立防止のために「群れとしての決まり」が作りあげられ、それが「しつけ」の基礎となった。

日本は一九世紀後半、海外から押し寄せる植民地化の圧力に対抗するために「国民国家」として自己を形成しなければならなかった。その時、国民統合の主柱となったのが天皇制で、明治国家は立憲君主制という国家体制を選ぶことを通じて、国外からの圧力に対抗しようとした。それと同時に、「しつけ」は群れの範囲を超えて、国家次元での「国家道徳」へと再編成されることとなった。それ以来、しつけと国家道徳との融合・統合が日本の道徳教育の課題となった。

第二次世界大戦で敗北を喫した日本は、立憲君主制に代わる主権在民の民主制を選択したが、東西冷戦のなかで、その国家目標はしばしば揺れた。戦後民主主義は個人の自由を強調したが、それは同時に「アプレゲール的自由奔放主義・利那主義」を生み出し、それと対決しなければならなかった。同時に冷戦構造下での西側陣営の一員として再建した日本は、共産主義陣営から発せられる反資本主義的思想とも対決しなければならなかった。さらに近年にいたっては、グローバリゼイションの進行のなかで、国境を超えた個人主義、私主義の台頭のなかで、改めて「人としての在り方」を再考しなければならなくなった。

こうして過去一三〇余年間、日本の道徳教育は近代国家としての自立、立憲君主制の確立、民主主義の徹底化、資本主義か社会主義かの選択問題、さらには私主義の台頭といった濃密な時間を体験してきた。これは近代日本が辿った自己葛藤史であり、この度刊行される『文献資料集成　日本道徳教育論争史』を通して、それぞれの時点で、どのような論争が戦わされたかを振り返ることを通じて、我々自身の自己形成史を見つめ直すことができる。

ここから戦前と戦後の道徳教育の真の対話が始まる

押谷　由夫（昭和女子大学大学院教授）

今日、ほとんどの国民は道徳教育を何とかしなければならないと考えている。しかし、効果的な方法が見いだせないでいる。ではどうすればいいのか。歴史に学ぶべきである。戦後の道徳教育は不幸な歴史を背負っている。それは戦前の道徳教育の全面否定から出発したことである。そもそも道徳教育は、国づくりにおいて重要な役割を果たす。当然のことながら、一人ひとりの人間形成においても不可欠である。道徳教育を抜きにした国家も個人もあり得ない。明治の人々は、そのことに気づき、真摯に議論を交わし、我が国独自の道徳教育を打ち立てた。それは外国からも高く評価されるものであった。

しかし、国づくりが誤った方向へとつき進むにつれ、道徳教育もまたその方向へと進んでしまった。そのことは深く反省しなければならない。そのうえで、どうして誤った方向に行ってしまったのかの分析も含めて、真摯に交わされた道徳教育論議に耳を傾ける必要がある。それは、今日の日本の礎を創ってくれた先人が、この最も根源的で重要な教育課題に、時代と格闘しながら正面から向き合い、苦悩しつつ知恵と成果を紡ぎだしてきたプロセスが刻されているからである。そこは、現在においても宝の山なのである。

このたび、日本の道徳教育史研究の泰斗・貝塚茂樹先生が、万感の思いをもって編纂されたのが『文献資料集成　日本道徳教育論争史』である。本編纂書によって、戦後の道徳教育において積み残してきた最も大きな課題である戦前の道徳教育との真摯な対話が可能になる。それは、道徳教育の本質を明らかにすることにもなるし、混迷の度を深める現在の道徳教育に光明を灯すとともに、再び世界へと発信していける道徳教育を構築していくことにもつながっていくであろう。これからの教育の在り方に責任をもつ人々に必読の書として本編纂書を推薦する。

＊本文献資料集成第Ⅰ期の刊行にあたっていただいた文章を再掲しました。

第15巻　「心のノート」と道徳の「教科化」論争

（平成14年～現在）平成14年から配布された「心のノート」に関する論議と、道徳の「教科化」に関する文献資料を収録

収録文献

〈第Ⅰ期・近代道徳教育の模索と創出・全5巻〉

第1巻　徳育論争と修身教育

「徳育論争」に関する基本文献

「修身ノ教授法ヲ論ズ」西村茂樹
「徳育余論」福沢諭吉
「小学校教員ノ急務」西村貞
「日本道徳論（抄）」西村茂樹
「徳育方法案（抄）」加藤弘之
「徳育論」田中登作
「日本教育原論」杉浦重剛
「九州各県巡回の途次小学校における示諭（学科の要領）」森有礼
「福島県議事堂において県官郡区長及び教員に対する演説」森有礼
「森文相に対する教育意見書」元田永孚
「倫理教科書につき意見書」元田永孚
「小学徳育新論（抄）」西村正三郎
「徳育鎮定論（抄）」能勢栄
「徳義論に関する意見」外山正一

修身科試験および修身科特設の可否論争

「尋常小学ニテ修身学ヲ教授スルニ口授ト書籍ニ拠ルノ得失」尾澤氏
「徳育管見」小竹啓次郎
「修身科口授」洒落生
「修身科ノ試験廃ス可シ」北部音太郎
「北部君ノ修身科試験廃止論ニ付キテ一言ス」鈴木枝生
「北部君ノ修身科試験廃止論ニ付キ異議アリ」間宮巍
「修身科を論して教へを間宮君に乞ふ」新内岩太郎
「修身科試験法」春畦逸史
「北部君ノ説ニ答フ」間宮巍
「再ビ間宮君ノ説ニ答フ」北部音太郎
「口授法と教科書教授との利害」田中登作
「国民ノ道徳」西村茂樹
「修身科を存廃するの当否如何」田中登作
「修身教授ノ弊害ヲ論ス」あ、ご、
「修身課」天洲居士
「修身教科用図書の編纂に就きて」教育報知（社説）
「小学生徒ニ修身書ヲモタシムベシト云フ論者ノ説ヲ見ル」佐藤初太郎
「生徒ニ修身書ヲ持タシムルニ就キテノ卑見」佐藤宗三郎
「小学生徒ニ修身書ヲ持タシムル可否ニ付キテ」高岡種吉
「修身教科書に関する訓令を読む」教育報知（社説）
「修身教科書に関する訓令に就て」教育時論（社説）

資料編

「教学大旨」明治天皇（元田永孚起草）
「教育議」伊藤博文
「教育議附議」元田永孚
「小学修身訓（抄）」西村茂樹編↘
「幼学綱要頒賜勅諭」明治天皇（勅諭）
「幼学綱要　例言・総目」元田永孚
「明治孝節録　例言」近藤芳樹
「婦女鑑　凡例・目録」西村茂樹
「小学教則綱領　第一条～第十条」文部省
「小学修身書編纂方大意」文部省
「小学修身書　初等科之部　首巻　教師須知五則」文部省
「小学修身書　初等科之部　巻一　教師須知七則　第一章～第十二章」文部省
「小学作法書　巻一　教師心得七則」文部省
「小学修身書　中等科之部　巻一　教師須知五則」文部省
「倫理書　中学校・師範学校教科用書（抄）」文部省

第2巻　教育勅語と「教育と宗教」論争

教育勅語と修身教育

「教育勅語御下賜事情」芳川顕正
「勅語衍義（抄）」井上哲次郎
「教育勅語衍義」今泉定介
「実験立案　修身教授及訓練法」峯是三郎
「井上哲次郎氏カ所述ノ勅語衍義ノ自序ヲ読ミテ悲憤ニ堪ヘズ」遂志生
「遂志生ニ答フ」井上哲次郎
「教育勅語と倫理説」大西祝
「忠孝と道徳の基本」大西祝
「勅語衍義を読む」三宅雄二郎
「修身書論」晃峯生
「日本道徳の中心は如何」西脇律堂
「修身教授案」森脇村次郎
「教育に関する　勅語の主旨の実際に行はるる状況」鈴木亀寿
「教育勅語に就きて」渡邊金作
「教育勅語の国法上に於ける効力」豊岡茂夫
「教育勅語の国法上に於ける効用を読む」米山喜太郎
「教育勅語の教授は何時如何になすべきか」加藤末吉
「勅語の暗誦と暗写」福島治三郎
「教育に関する御勅語御本文の教授に就いて」水戸部寅松
「勅語教授上の注意」山本良吉
「『国体の精華』新解」堀尾石峰
「教育勅語解釈上の根本問題」吉田熊次

資料編

「教育ニ関スル勅語」明治天皇（勅語）
「地方長官会議に於ける榎本文部大臣回答要旨」榎本武揚↘
「修身教育に関する文部省の方針」文部省
「小学校教則大綱　第一条～第二条」文部省
「小学校修身教科用図書検定標準」文部省
「小学校修身教授上ニ関スル注意」文部省
「尋常小学修身書　巻六（第二十六課～第二十八課）」文部省
「教師用　尋常小学修身書　巻六（第二十五課～第二十七課）」文部省

「教育と宗教」論争

「宗教と教育との関係につき井上哲次郎氏の談話」井上哲次郎
「寄開発社書」井上哲次郎
「再寄開発社書」井上哲次郎
「宗教と教育との関係につき井上氏に質す」本多庸一
「文学博士井上哲次郎君に呈する公開状」内村鑑三
「教育と宗教との関係」教育時論（社説）
「宗教の将来に関する意見」井上哲次郎
「人格論（井上博士を難ず）」海老名弾正
「所謂将来の宗教に就て」加藤弘之
「耶蘇教問題」大西祝
「当今の衝突論」大西祝
「衝突論に就て」大内青巒
「大西君の衝突論に就いて」大内青巒
「宗教と教育との関係」教育時論（社説）
「政治教育と宗教との関係に就て」伊藤博文
「宗教ノ大害」内藤耻叟
「小学校における宗教的感情の養成」佐々木秀一
「宗教と教育との関係」澤柳政太郎
「宗教と教育とを混同する勿れ」教育研究（社説）

第3巻　国定修身教科書の成立（第一期・第二期）と修身教育

第一期国定修身教科書の成立とその批判

「修身教授と国民道徳（抄）」吉田熊次
「徳育の変遷に就ての所感」井上哲次郎
「国定修身書を評す」中島半次郎
「我国の家族制度は称揚す可きものに非ず」板垣退助
「家族主義と個人主義」高楠順次郎
「家族主義に対する疑問」藤井健治郎
「教科書の改造」澤柳政太郎
「忠孝基本の論争」堀尾石峰
「祖先崇拝に就て」澤柳政太郎
「修身科教授法」吉田熊次↖
「修身科及国定修身教科書に就て」吉田熊次
「国定修身書に対する批評の批評」相島亀三郎
「時局と修身教授」三浦喜雄

資料編

「〔第一期〕国定教科書編纂趣意書　小学修身書編纂趣意報告」文部省
「〔第一期〕高等小学修身書　第一学年（第十八課～第二十一課）」文部省
「〔第二期〕修正国定教科書編纂趣意書　第二篇（尋常小学修身書　巻二　編纂趣意書　高等小学修身書新制第三学年用編纂趣意書）」文部省
「〔第二期〕修正国定教科書編纂趣意書　第四篇（尋常小学修身書編纂趣意書）」文部省
「〔第二期〕尋常小学修身書　巻四　第二十七　よい日本人」文部省
「〔第二期〕尋常小学修身書　巻六　第八課　祖先と家」文部省
「国費ヲ以テ小学校修身教科用図書ヲ編纂スルノ建議案」馬屋原彰
「小学校修身書に関する建議案・徳育帰一と修身教科書編纂の必要」安藤亀太郎他三名
「修身教科書編纂ノ理由」文部省
「東久世伯、田中、野村ニ子文部省著作小学修身書ニ関スル意見」東久世通禧、田中不二麿、野村靖
「東久世伯及田中野村ニ子ノ意見ニ対スル文部大臣答」文部省
「国定小学修身書ニ対スル意見」日本弘道会

第4巻　国民道徳論と修身教授

国民道徳論および国民道徳論への批判

「教育雑感」井上哲次郎
「若き日本の国民道徳問題」藤井健治郎
「我が国民道徳は奴隷道徳に非ず」吉田熊次
「日本道徳の性質」堀尾石峰
「国民道徳の施設上に一大改革を加ふべきの議」江木千之
「新制三学年用高等小学修身書の批評」藤井健治郎
「新制三学年用高等小学修身書に対する藤井君の批評の批評」吉田熊次
「国民道徳教育の大本」教育時論
「井上博士の日本文明論及其評論」堀尾石峰
「国民道徳の本旨」穂積八束
「国民道徳概論（抄）」井上哲次郎
「神勅と国体との話」井上哲次郎
「世界に於ける皇室の特色」井上哲次郎
「国民道徳要義（抄）」深作安文
「我が国民道徳（抄）」吉田熊次
「我が国民道徳の要旨」吉田熊次
「祖先崇拝の動機」吉田熊次↘

「長者道徳と我が国民道徳」吉田熊次
「我が国民道徳の将来」吉田熊次
「国民道徳の概念論」中島徳蔵
「国民道徳」紀平正美
「倫理学と国民道徳と日本的と」桑木厳翼
「国民道徳論に関して」大島正徳
「国民道徳に就て」井上哲次郎
「国民道徳三講（抄）」亘理章三郎
「危険思想を排す」和辻哲郎
「『いはらき』紙に載せられたる『国民道徳と個人道徳』」菊池謙二郎
「国民道徳の問題」和辻哲郎
「国民道徳要義（抄）」亘理章三郎

資料編

「〔第三期〕高等小学修身書新制第三学年用　国家　臣民　家　祖先　忠孝　愛国」

第5巻　修身教授論の諸相

修身教授論

「修身教授撮要（抄）」佐々木吉三郎
「我小学校における修身科の教授」槇山栄次
「教授法の新研究（抄）」槇山栄次
「実験修身教授法（抄）」加藤末吉
「修身教授に関する卑見」小山忠雄
「修身教授上に於ける卑見」羽山好作
「修身倫理の教授法につきて」藤井長蔵
「修身教授上の二原則」川上新之助
「吾が修身教授」福寄幸三郎
「中学校の修身科に就て」浦谷熊吉
「吾が修身教授の記」狩野力治
「学校に於ける修身教授」湯本武比古
「修身教授に関する私見」依田豊
「修身科の改善に就て」中島力造
「修身教授改良意見」三輪田元道
「修身科の教授を適切有効ならしむる方法」文部省
「修身教授」山本良吉
「修身教授に就きて」戸倉如柳
「修身教授と歴史教授」堀尾石峰
「修身教授の新主義」澤柳政太郎
「欠伸と修身」教育時論（コラム）
「修身科の教授段階と各種教材の取扱」水戸部寅松↘

「修身教授上の諸問題に就いて」矢水
「修身教授の応用に就て」相島亀三郎
「修身科の受持について」加藤末吉
「修身教授は余りに単調ならずや」加藤末吉
「修身教授の難点」加藤末吉
「人格的教育学の上より見たる修身教授」二階堂清寿
「修身教授上の重要問題」二階堂清寿
「現代教育の欠陥に対する救済方案」東京高等師範学校附属小学校

修身教授と訓練論

「中学校倫理教授及訓育私見」山本良吉
「訓練雑話」光藤泰次郎
「修身教授及訓練の積極主義」大橋銅造
「教育の趣旨と訓練及教授」堀尾石峰
「児童訓練の諸問題」聖天生
「操行論」湯本倉之助

作法教授

「作法につきて」相島亀三郎
「女子の修身及作法に就て」下田次郎
「作法問題に就て」濱幸次郎
「作法教授に就て」堀尾石峰

成績考査

「修身科の成績考査法に就て」相島亀三郎
「操行考査標準案」片山カズ・庄野クニエ・内藤ヨネ
「成績考査の一意義」堀尾石峰
「修身科に於ける成績考査に対する吾人の考」野沢正浩

収録文献

〈第Ⅱ期・修身教育の改革と挫折・全5巻〉

第6巻　修身教授改革論の展開

大正新教育運動と修身教授改革論

「修身教授革新論（抄録）」小原国芳
「生活化の修身教育（抄録）」野瀬寛顕
「修身教育の新体系（抄録）」岩瀬六郎
「現代修身教育の概観」松本浩記
「生活修身の新主張」岩瀬六郎
「作業主義の修身教育」渋谷義夫
「生活訓練と道徳教育」野村芳兵衛
「今後の修身教育」野瀬寛顕
「社会的修身教育論」松本浩記
「新教育と修身教育」野村芳兵衛
「徳育について」天野貞祐
「修身指導過程の実践的考察」岩瀬六郎

澤柳政太郎の修身教授論争と「川井訓導事件」

「修身教授の不成績なる原因」澤柳政太郎
「修身教授は尋常第四学年より始むべきの論」澤柳政太郎
「初学年修身科教授廃止説に反対す」日田権一
「現行通り初学年より課するを可と信ず」中野明一郎
「澤柳先生の『修身教授を尋四より始むべきの論』を読みて」山崎隆
「澤柳先生の所論に反対す」二神真敬
「澤柳博士の修身科繰り下げ案に反対す」川島庄一郎
「再び修身教授は尋常四学年より始むべきを論ず　反対論者に答ふ」澤柳政太郎
「御尋ねしたいこと、感じたこと」佐々木秀一
「佐々木助教授の質問に答ふ」澤柳政太郎
「松本女師附属事件考察」西尾実
「山松校長及池原主事訪問記」守屋喜七
「川井訓導の修身教授に対する諸家の意見」信濃教育（特集）
三宅雄二郎／澤柳政太郎／古島一雄／阿部次郎／石原謙／岩波茂雄／和辻哲郎／土居光知／篠原助市／興良熊太郎／久保田俊彦／伊藤長七／北澤種一／長田新／太田孝作
「経過と感想」川井清一郎

→成城小学校で教鞭をとった松本浩記の編集による雑誌『修身教育』。同誌には教育関係者・実践者による論考が数多く寄せられ、当時の道徳教育を巡る熱気あふれる雰囲気を知ることができる。

↑特集「川井訓導の修身教授に対する諸家の意見」。1924 年の「川井訓導事件」において、『信濃教育』は川井清一郎に同情的な論調であった。

第7巻　修身教育の実践と国定修身教科書（第三期〜第五期）

修身教授論の諸相

「修身教授の実際的新主張（抄録）」川島次郎
「修身及公民教育原論（抄録）」野田義夫
「現行修身書の生活化（上）」小林佐源治
「徳育の効果を挙ぐるには何に最も留意すべきか」嘉納治五郎
「我が国徳育の心髄骨子に就いて」井上哲次郎
「現代修身教育の諸相と其の批判」松本浩記
「徳育の更新」原房孝
「新時代に於ける修身教育の指導精神」藤谷保
「道徳教育の革新に就て」吉田熊次
「道徳教育の刷新」河野省三
「修身教育効果の反省」堀之内恒夫
「徳育に於ける知と行の問題」渋谷義夫

修身教育の実践と成績考査

「修身教授の方法に関する二三の問題」原房孝
「修身科の成績考査と操行査定に就いて」亘理章三郎
「学業成績並に操行査定の標準」東京府教育研究会
「徳目か人物か」亘理章三郎
「成績考査と操行査定の理論的研究」松原一夫
「修身科教材の類型と指導」堀之内恒夫
「修身科に於ける人物単元の取扱」堀之内恒夫

資料編

『尋常小学校修身書　巻六（第四課　国交）』文部省
『尋常小学校修身書　巻二（二十一　テンノウヘイカ）』文部省
『ヨイコドモ　下（十　兵タイサンへ）』文部省
『初等科修身　四（二　青少年学徒の御親閲）』文部省
『国民科修身『ヨイコドモ』編纂趣旨』竹下直之（文部省）
『五、六年修身の取扱ひ方』野瀬寛顕

→『ヨイコドモ　下』より「兵タイサンへ」。

↑第五期国定教科書『ヨイコドモ　下』。

第8巻　修身教育と公民教育・訓練

修身教育と公民教育

「現代修身教育の根本的省察（抄録）」堀之内恒夫
「公民教育と道徳教育」田制佐重
「修身教科書と公民教育」藤本万治
「公民教育と修身科」鹿児島登佐
「公民的陶冶を意図したる修身教育」上村文二郎
「青年学校の修身及公民科に就て」千葉敬止
「修身科と公民科との関係」萩原拡
「青年学校に於ける修身及公民科の取扱に就いて」山口啓市
「修身科に於ける公民的教材の取扱」田中武夫
「新要目に於ける修・公関係の検討」近藤恭一郎
「修身科と公民科の相関と新要目」伊藤和衛
「修身教材の三分類と公民科との関係」松田克三
「教育使命としての公民科と修身科」加藤良一
「修身科と公民科との統合問題」池岡直孝
「修・公統合論の根拠を観る」近藤恭一郎
「青年学校修身及公民科の重点」鈴木静穂
「公民教育と新道徳原理」早瀬利雄
「強調すべき現時の修身教育・公民教育」島崎晴吉
「青年学校修身及公民科の本質」鹿児島登佐
「修身科・公民科の分離統合の問題」草場弘

修身教育と訓練

「訓練論」吉田熊次
「説集　修身教授新潮（抄録）」近代学術研究会
「生活指導と訓練の新研究（抄録）」鹿児島登左
「新日本の修身と訓練（抄録）」野瀬寛顕
「修身と生活訓練」塚本清
「修身訓練研究問題の動向」後藤博美
「現代訓練の実際問題」松本浩記
「日本精神と訓練」齋藤富
「日本学より見たる学校訓練の中心問題」小野正康
「生活に基調を置く本校の訓練」国東尋常高等小学校
「訓練の修道院化」坂本駒夫
「修身科に於ける生活指導」向井繁雄

←吉田熊次『訓練論』
（初版は 1910 年）。

←『初等科修身　四』。

第9巻　修身教育と宗教教育

宗教教育論の展開

「宗教と教育（抄録）」姉崎正治
「宗教と教育との関係」吉田熊次
「宗教と教育」三宅雄次郎
「宗教と教育」加藤弘之
「宗教と教育」大島正徳
「宗教々育論の経過」谷本富
「宗教と教育」高楠順次郎
「普通教育と宗教」新渡戸稲造
「学校教育と宗教の関係」加藤末吉
「国家教育と宗教」岡田良平
「宗教と教育の関係」成瀬仁蔵
「宗教と教育」松本文三郎
「宗教と道徳」吉田静致
「児童宗教教育（抄録）」関寛之
「宗教教育論（教育より宗教への問題）」福島政雄
「宗教教育の目的に関する一考察」大村桂巌
「宗教々育の本義」谷本富
「宗教と教育」藤井健治郎
「宗教教育の真諦（抄録）」谷本富
「学校に於ける宗教教育」佐々木秀一
「修身教育と宗教」野田義夫
「宗教と教育との関係」澤柳政太郎
「宗教と教育」澤柳政太郎
「教育と宗教」関屋龍吉
「宗教教育は如何にすれば可能なるか」海老名弾正
「嵐の中の宗教々育」赤井米吉
「宗教教育の意義とその限界」友枝高彦
「宗教教育論」今岡信一良
「宗教教育の本質」三木省巳

学校教育と「宗教的情操」

「我が国民教育と其宗教的心情」加藤玄智
「教育勅語と日本人の国民的宗教情操」加藤玄智
「宗教教育の原理と実践」松本浩記
「修身教育に於ける宗教的陶冶」熊井甚太郎
「宗教的情操の意義と国民教育」長谷川如是閑
「答申を診断する」野島舜二郎
「教育と宗教の本質的関係」吉田熊次
「宗教教育答申案及通牒に就いて」入澤宗寿
「我が宗教々育の歴史的考察」入澤宗寿
「道徳教育と宗教的情操教育」河野省三
「学校徳育と宗教教育」萩原拡

資料編

「宗教的情操の涵養に関する留意事項」文部省

↑『ヨイコドモ　上』挿絵より。

學校德育と宗教教育

論說

荻原　擴

←『道徳教育』1936 年 12 月号掲載論文。1935 年の文部次官通牒により、教育勅語に基づくという条件の下で、公立学校においても宗教教育が可能となった。しかし戦局が緊迫するなか、この通牒は、児童・生徒が戦勝祈願のために神社参拝することを正当化する根拠として作用した側面が強かった。

推薦のことば　『文献資料集成　日本道徳教育論争史』刊行にあたって

歴史の中の論争を通して道徳教育の本質に迫る

森田　尚人（前教育哲学会代表理事 元中央大学教授）

冷戦のさなかに学生時代を過ごした世代にとって、道徳教育は政治的な争点としてイデオロギー批判の対象であるか、それとも、教育学にとってさして重要でない問題として見ない振りしてやり過ごすかのどちらかだった。ここ数年ほど学生の体験を聞いて思うのは、公立学校における道徳の時間には依然として五五年体制が続いているのではないかということである。歴史に眼をふさいだ「安易なイデオロギー論」か、深刻な「思考停止」が、いまなお教育現場と教育学界を広く覆っているのである。

貝塚茂樹氏の鍥骨の作品である『文献資料集成　日本道徳教育論争史』は、そうした道徳教育の現状に対する危機意識から産み出された。そのために貝塚氏は本集成を構想するにあたって、二つの視点を交錯させようとしたように思われる。ひとつは、どこまでも歴史研究として、近代日本の道徳教育の歩みを客観的に追認しようとする学問的姿勢である。戦後の道徳教育研究は、戦前の道徳教育を感情的に「断罪」したにすぎないからである。いまひとつは、道徳教育の歴史を「論争」として再構成することである。「何が善で何が悪か」という存在論的問題と関わる道徳の問題を、今日の高みから一義的に評価することは傲慢にすぎるだろう。かつて時代の課題と向き合った論争を通して、今日の道徳教育のあり方を考え続けることこそが求められているのではないか。

プラトン『メノン』は「徳は、人に教えられるのか」という問いを主題にしたものだが、ソクラテスは議論のはっきりした結論を示さないままに、われわれを置き去りにしてしまう。道徳が教えられるものならば、それは知識でなければならない。しかし、人はそうした知識を学んだからといって有徳な人物になるわけではない。本シリーズを通して、道徳教育とはこうした問いを、制度化された学校のなかで行わなければならないという、二重にも、三重にも困難な仕事であることを自覚したい。

教育学研究の新たな地平を拓く資料集成

沖田　行司（同志社大学大学院教授）

私たちの先人は、「学び」や「教え」というものを、「人となる」もしくは「人となす」というように、人間的な成長と深く結びつけて理解してきた。とりわけ徳の形成は、学問や教育の大きな目的と考えられてきた。ところが、明治以降の教育の近代化は、西洋の知識の獲得と、日本人としてのアイデンティティーの確立という二つの方向に教育課題を分化し、いわゆる知育と徳育という二項対立的な課題を作り出してしまった。この問題が最も先鋭に論じられたのが、明治十年代の徳育論争である。明治の知識人たちが徳育論争を日本の近代化における最も大きな教育的課題としたのは、国境を越えて受け容れた知識は、西欧社会においては、聖書を基盤とする深いキリスト教道徳を前提としていたことを知っていたからである。この徳育論争は、「教育に関する勅語」の発布によって、ある意味においては深められることなく、終息する形となった。その後、道徳と教育の問題は絶えず浮上しては閉じられるという過程を繰り返してきた。

戦後教育の出発にあたり、道徳教育は日本の軍国主義のイメージと重ね合わせて論じるという、イデオロギー解釈がほどこされてきた。このために、道徳教育は教育学研究の場ではなく、常に政治的な次元でしか論じられてこなかった。このような日本の教育における「未完の近代」は大きな教育問題が生じると決まって呼び起こされるが、すぐさま戦後教育の呪縛によって閉じられてしまう。このたび、文献資料集成として『日本道徳教育論争史』が刊行されるが、ここで取り上げられている個々の文献資料の選択そのものが、監修者である貝塚茂樹さんの研究者としての確かな視点と豊かな議論を再生する方向で編まれていることが窺われる。私たちが直面している現代日本の教育問題を、根底的に問い直す研究資料として、刊行の意義は計り知れない。

＊本文献資料集成第Ⅱ期の刊行にあたっていただいた文章を再掲しました。

第10巻　日本精神・皇国民の錬成と国民道徳

日本精神論の展開

- 「日本教育学（抄録）」近藤寿治
- 「日本倫理と日本精神（抄録）」深作安文
- 「教育的皇道倫理学（抄録）」吉田熊次
- 「我が国民精神の特色」井上哲次郎
- 「国家思想と学校教育」吉田熊次
- 「現代学生とマルクス主義」河合栄次郎
- 「国民精神とは何乎」谷本富
- 「神ながらの道と徳育」井上哲次郎
- 「日本精神の検討」河野省三
- 「国民道徳か皇道か」萩原拡
- 「日本精神の本質」徳富猪一郎（蘇峰）
- 「国体精神と修身教育」原房孝
- 「修身教育と国体の明徴」熊井甚太郎
- 「国体の本義」佐々木秀一
- 「国民道徳論と国体論」西晋一郎
- 「皇国の道」伊東延吉
- 「臣民の道について」近藤寿治

国民学校と修身教育

- 「青少年学徒に下し給はりたる勅語」佐々木秀一
- 「教育勅語の「斯ノ道」と国民学校教育本旨の「皇国ノ道ニ則リ」云々との連関を中心問題として」小野正康
- 「教育に関する勅語と国民学校」原房孝
- 「国民学校の特質と修身教育の地位」堀之内恒夫
- 「国民学校の精神に就て」伊東延吉
- 「行の教育形態―初等教育への一試論」宮坂哲文

資料編

- 「国体の本義（抄録）」文部省
- 「臣民の道（抄録）」文部省
- 「錬成の本義について」国民錬成所

↑「国体の本義」に基づく国民の養成機関として設置された国民錬成所による冊子『錬成の本義について』（1942年）。

←『国体の本義』（初版は1937年）。

←荒木大将の前で「愛国体操」を行う子どもたち。

文献資料集成　日本道徳教育論争史　全15巻

第Ⅰ期　近代道徳教育の模索と創出　全5巻

1. 徳育論争と修身教育
2. 教育勅語と「教育と宗教」論争
3. 国定修身教科書の成立（第一期・第二期）と修身教育
4. 国民道徳論と修身教授
5. 修身教授論の諸相

第Ⅱ期　修身教育の改革と挫折　全5巻

6. 修身教授改革論の展開
7. 修身教育の実践と国定修身教科書（第三期〜第五期）
8. 修身教育と公民教育・訓練
9. 修身教育と宗教教育
10. 日本精神・皇国民の錬成と国民道徳

第Ⅲ期　戦後道徳教育の停滞と再生　全5巻

11. 「修身科」復活と「国民実践要領」論争
12. 「特設道徳」論争
13. 「期待される人間像」論争
14. 道徳教育の課題と授業論をめぐる論争
15. 「心のノート」と道徳の「教科化」論争

＊各期冒頭巻の巻頭に「刊行にあたって」、また全巻の巻頭に「解説・解題」を付す（いずれも執筆は貝塚茂樹・武蔵野大学教授）。